

- ・学習指導要領を踏まえた指導方法と評価の工夫改善
- ・「主体的・対話的で深い学び」の実現

委員

校長(藤本武)教頭(美馬宏紀)6年主任(元木里美)1年主任(古川加寿美)2年主任(西谷基子)3年主任(高原まゆみ)4年主任(杉本知美)5年主任(森脇沙汰夏)特別支援コーディネーター(糸林麻都香・三浦理絵・酒巻愛子・瀧口悠里)指導方法工夫改善担当(吉岡千江美)

藤本 武

【各校の取り組み情報の把握について】

ICT の効果的な活用と話し合い活動の充実により、児童生徒の学力向上を図る。

管理職による授業参観や教員からの報告等、様々な機会を捉え、取り組み状況の把握を行う。

◎次の(1)～(3)をバランスよく取り組み、学力の向上を推進

(1)知識・技能の習得

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○漢字・計算やICTの基礎的・基本的な技能について、学年相応の力が付いてきた。 ○視写をすることで、速く丁寧に書ける児童が増えてきた。 ●語彙力が乏しく、読解力や聞き取る力、文章を書く力が不足している。	①基礎的・基本的な知識・技能について学年相応の力を身に付けることができています。 ②語彙数が増え、正しい言葉や漢字で読んだり書いたりすることができるようになりました。 ③各教科の単元テストで、低学年は8割以上の児童が正答率 80%、中・高学年は7割以上の児童が正答率 75%を超えるようにする。	①学習タイムや授業の中で、漢字・計算やICTの基礎的事項の定着を図る。 ②語彙力を増やすために、音読や週末読書を継続的に実施する。 ③低学年は、視写教材やコグトレを取り入れる。また、全学年を通してNIEを継続的に取り入れ、読解力や文章を書く力を養う。	①学習タイムや授業の中で漢字・計算やICTの基礎・基本を継続的に行う。 ②図書室への利用を働きかけたり、子どもたちの興味のある本を取り入れたりする。 ③低学年は、曜日を決めてコグトレを取り入れる。また、阿波っこタイムズなどを活用し、読書タイムの時間にNIEを継続的に取り入れ、読解力や文章を書く力を養う。	①漢字・計算やICTの基礎的・基本的な技能については、学年相応の力が付いてきた。 ②音読や週末読書は、確実に実施できている。図書室も利用しているが、同じような種類の本を読むことが多い。 ③少しずつコグトレが活用できるよう取り組んでいる。NIEは、継続的に取り組むことができているが、学年によって差が見られる。	①学習タイムや授業の中で、漢字・計算やICTの基礎的事項を継続して行う。 ②分類番号で本を借りるなど様々な本に親しむ機会を増やす。音読や週末読書を継続的にを行い語彙力を養う。 ③全学年、作文帳で日記を書くことで、学習したことを生かす力をつける。また、NIEを継続して取り入れ、読解力と文章を書く力を養う。

(2) 思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○学年の発達段階に応じて少しずつICTを活用できるよう取り組んでおり、高学年は、スピーチや発表、振り返りなどで、ICTを効果的に活用することができている。 ○振り返りでは、自分の言葉で話せる児童が増えてきている。 ●全体の中では自信が持てず、自分の考えを表現できる児童が少ない。	①目的に応じて、理由を明らかにしながら、自分の考えや思いを適切に文章に表現することができる。 ②友達の考えと自分の考えを比べながら、聴き、考えをまとめたり伝えたりすることができる。 ③考えたことや伝えたいことを、適切な音量や速さで話すことができる。	①自分の考えや思いを文章に書いたり、タブレットやホワイトボードを使って人に伝えたりする活動を取り入れる。 ②「発表名人」を意識させたり、考えをまとめときのポイントを提示したりする。 ③ペアトークやグループトークを継続して行うことで相手に伝わるような話し方や聞く力を身に付けさせる。	①学年の発達段階に応じたタブレット活用技能を身に付けることができるよう継続的に指導を行っている。 ②と③については、継続して行う。	①発達段階に応じて、タブレット活用技能を身に付けることができている。その技能を活用し、自分の考えを表現できる児童が増えてきた。 ②タブレットで考えを共有し、友達と自分の考えを比べながら学習に取り組む姿が見られてきた。 ③ペアトークやグループトークを継続して行い、相手を意識して話そうとしていた。	①スピーチやプレゼンなどの発表で、ICTを効果的に活用する。 ②ICTの活用により、考えを共有することで発表が苦手な児童も考えを発信しようとする意欲をもたせる。 ③ペアトークやグループトークを継続して行うことで、相手に伝わるような話し方や適切な声の大きさに話す習慣を身に付けさせる。

(3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○ほとんどの児童が「あいなん学習ルール」を意識して行動できている。 ●振り返りの際に、単純な表現で終わってしまう児童もいる。 ●個人用の辞書を持っているが、積極的に活用できていない児童もいる。 ●自主学習について定着はしつつあるが、取り組み方に差がある。	①単元ごとの振り返りを様々な形で行うことによって、主体的に学習することができる。 ②辞書を積極的に活用して、学習に活かすことができる。 ③自分のめあてを持って自主学習に取り組むことができる。	①学年に応じて、タブレット活用して単元や授業の振り返りをさせる。 ②3年生から個人用の国語辞典を持たせ、活用させる。 ③「自主学習のめあて集」や自主学習ノートの例を配布し、活用することで、主体的に学ぶ習慣をつけさせる。	①クラスサイトを活用して、学習の見通しを立てたり、単元や授業の振り返りをさせたりする。 ②と③については、継続して行う。	①授業の振り返りは、発言・ノート・タブレット等を使って、学年を通してできている。 ②3年生から個人用の国語辞典を活用できている。 ③発達段階に応じて、自主学習に取り組んでいるが、内容については個人差が大きい。	①授業の振り返りの内容についてのモデルを提示する。学校全体で形式を統一する。 ③自主学習の取り組み方や学力向上に関することを、学年だよりや学校からのお便りで発信し、啓発する。

令和6年度 学力向上ロードマップ

